

Global Service Learning 体験記

- 活動先国：モンゴル Mongolia
- 活動期間（実際の現地滞在期間）：西暦 2024 年 8 月～ 2024 年 8 月
- 学部・学科：人文学部 英語英米文化学科
- 参加時の学年：2 年

私は 3 週間モンゴルに滞在し、モンゴル国営放送局 MNB の「Voice of Mongolia」で日本語・英語セクションでのインターンシップに参加しました。もともと世界の歴史や言語に興味があった私は、世界史のなかで特にチンギス・ハーンやモンゴル帝国に関心があったため、モンゴルを選びました。単なる観光や留学ではモンゴルを深く知ることができないと思い、今回インターンシップという形での滞在を決めました。

モンゴルに対する私の第一印象は、世界史におけるモンゴル帝国のイメージでした。かつてヨーロッパからアジアまで版図におさめていた広大な国土、マルコ・ポーロの逸話、カラコルムやザナドゥといった想像をかきたてる要素に魅了されていました。

実際にモンゴルに来てみるとすぐさま、想像より近代的な一面があり、自由な精神と居心地のよい雰囲気があることに気づきました。ウランバートルの中心部にはロシア風の建築物が並び、街のあちこちにチベット仏教の僧院やゲル地区があり、その魅力あふれる景観に飽きることはありませんでした。モンゴル人は他のアジア人に比べて落ち着いている印象があります。この辺りは日本人と似ていると思いました。お年寄りや子供に対して思いやりがあり、礼儀正しく接していました。一方、女性の社会進出がとても盛んで、この一面は男性優位の社会が残る日本と比べて、先進的な側面であるといえます。

私はウランバートル市内に滞在していたので、生活は比較的便利でした。どこに行ってもコンビニがあり買い物に困ることはなかったし、Wi-Fi や休憩できる場所が必要なときはカフェを利用しました。いずれも店員さんと英語で注文することができ、海外発行のデビットカードで支払いも簡単でした。スーパーに行くと、乳製品や羊肉が安いのにまず驚きました。したがって、私の食生活は肉料理中心でした。モンゴル料理は味付けが薄めで、岩塩だけでアレンジされたさっぱりした味です。羊肉は最初こそ噛みづらくセがありましたでしたが、毎日食べていたのですのですぐに慣れました。

MNB「Voice of Mongolia」でのインターンシップのおかげで、私のモンゴル生活は充実したものになりました。業務は主に、英語と日本語セクションでのニュース原稿執筆や校正、ラジオのパーソナリティを担当しました。日々モンゴルの最新ニュースに接するうちに、モンゴル国の外交政策にも詳しくなりました。モンゴルがロシアと中国という 2 つの大国に挟まれながらも、中立を保ち、政治的干渉を避けながら友好関係を維持していることに驚きました。たとえば、モンゴルと中国を結ぶロシア主導のパイプライン計画を、モンゴル側が自身の国家戦略から外すことで、中国やロシアとの距離感をうまく調整している一方で、石炭輸送のための鉄道建設には協力していたりします。ラジオのパーソナリティとしてニュースを読み上げたり、インタビューに答えたりする仕事は大変でしたが、語学力を向上させる良い機会でもありました。ラジオは声だけで情報を伝えなければならない媒体なので、いかに簡潔で、聞き手にわかりやすく、かつ不足なく伝えるかを常に考えなければなりません。また、文章をチャックごとに区切って読み上げたり、人名や地名など特定の単語を簡単なワードに置き換えたりしなければなりませんでした。こういった業務のおかげで、将来さまざまな場面で役立つスキルを身につけることができました。

しかしながら、ウランバートルにずっと滞在していたわけではなく、仕事が休みの週末を使って地方にも足を運びました。ウランバートルから西へ車で 6～7 時間走ったところにハラホリンという街があります。雄大な草原と澄み渡る青空に囲まれたこの町は、かつてモンゴル帝国首都カラコルムでした。約 800 年前、ハラホリンは世界各地からヒトやモノが集まり、現在のニューヨークやロンドンに相当するような世界一の中心都市として知られていました。現在は「エルデネ・ゾー」と呼ばれるモンゴル最古の仏教僧院が残っており、かつての繁栄の面影を感じることができます。実は、この僧院はカラコルム時代の建材を流用して建てられたもので、レンガ自体にも実は数百年の歴史が込められています。建物の外観はチベットのポタラ宮を彷彿とさせる赤と白で彩られており、青い空と緑の草原とのコントラストがとても美しかったです。

エルデネ・ゾーの隣にはカラコルム博物館があります。この場所で行われた発掘調査や研究成果が博

物館に展示されています。たとえば、2000 年以上前に栄えた匈奴帝国のコイン、柔然族やテュルク族の陶器、契丹(遼)が戦いで使った矢じりなどが展示されています。なかでも特筆すべきは、オゴデイ・ハーン時代に発展した帝都カラコルムの都市を再現したジオラマです。ハーンの宮殿が中央にそびえ立ち、街路が中国の長安のように碁盤目状に整備されていました。イスラム教のモスクやキリスト教の教会も街のあちこちに点在しています。もちろん、モンゴルらしくゲルもたくさん見かけました。

今回、モンゴルに3週間滞在しましたが、まだ物足りなさを感じています。次回はもう少し遊牧民の生活を見てみたいし、鉄道で自然の風景を楽しみたいです。また、モンゴルのさらなる発展を期待して、今後どのように進化していくのかも注目していきたいです。ウランバートルに導入予定の地下鉄やハラホリンの新首都プロジェクトなど、モンゴルの未来が楽しみです。

